『淮南萬畢術』拾遺（四）

有馬　卓也

7　『霊奇方』

『霊奇方』は『隋書』経籍志には見えない。『日本国見在書目録』医方家に「『霊奇奥秘術』一（陶隠居撰）」とあるが、本書との関係は不明である。現在は伝わらないが、『醫心方』には全三三条を確認することができ、その内容は『萬畢』との近似性が高い。また『萬畢』には

（九）鵲腦令人相思。〔注〕取雌雄鵲各一、燔之四道通。丙寅日與人共飲酒、置腦酒中、則相思也。（鵲の脳は人をして相思はしむ。〔注〕雌雄の鵲各一を取り、之を四道通に燔く。丙寅の日に人と共に飲酒するに、脳を酒中に置けば、則ち相思はしむ。）

→『医心方』巻二六相愛方「靈奇方云、以桃板三寸書姓名、埋四會道中、卽相憎。與此正相反。」

（一八）蜘蛛塗布、而雨自晞。〔注〕取蜘蛛置甕中、食以膏百日。煞以塗布、而雨不能濡也。（蜘蛛は布に塗れば、而ち雨自ずから晞く。〔注〕蜘蛛を取りて甕中に置き、食はすに膏を以てすること百日。殺して以て布に塗れば、而ち雨ふるも濡らすあたはざるなり。）

→『医心方』巻二六避雨湿方「靈奇方不沾法云、蜘蛛塗布巾、天雨不能濡。」

の二条が同主旨の文として葉徳輝によって提示されている。

［1］

【原文】

靈奇方。令白髮還黑術方。隴西白芷一升・旋復一升・秦桝一升・好桂心一尺。合搗篩。井花水服方寸匕日三。卅日白髮悉黑。禁房内。以此藥食白犬子、廿日皆變爲黑。（『醫心方』巻四・治白髮令黑方第四）

【書き下し】

『霊奇方』。白髮をして黒に還さしむる術方。隴西の白芷[①]一升・旋復[②]一升・秦椒[③]一升・好き桂の心一尺。合し搗きて篩す。井花水もて方寸匕を服すること日に三たびす。卅日にして白髮悉く黒

し。房内を禁ず。此の薬を以て白犬の子に食はしむれば、廿日にして皆変じて黒と為る。

【注】

① ハナウド。ヤブウド。

② 旋覆花のことと思われる。オグルマ。

③ 文意により「桝」を「椒」に改めた。秦椒は山椒に同じ。

【現代語訳】

『霊奇方』。白髪を黒髪に戻す術方。隴西産のハナウド一升・オグルマ一升・サンショウ一升・上質の桂の心一尺を準備し、それらを一緒に（臼で）搗いて篩（ふるい）にかける。それを一日三回、方寸匕を井華水で服用する。三十日で白髪はすべて黒くなる。男女の交わりを禁ずる。この薬を白い子犬に食べさせると、二十日で黒犬に変化する。

【補】

○ 頭髪に関する記述は『萬畢』にも（七〇）のぬけないようにする処方、（七三）の白髪を黒くする処方、（七五）の頭髪を白くならないようにする処方などが見られる。

［2］

【原文】

靈奇方。常以樊石熬末、付兩掖下。（『醫心方』巻四・治胡臭方第二四）

【書き下し】

『霊奇方』。常に礬石[①]を以て熬りて末とし、両掖の下に付く。

【注】

① 文意により「樊」を「礬」に改めた。「礬石」は「明礬（みょうばん）」に同じ。ただし「緑礬」或いは「黄礬」をさす可能性もある。

【現代語訳】

『霊奇方』。ミョウバンを熬って粉末にしたものを、常に両掖の下に付けておく。（そうすると体臭が消える。）

【補】

○ 体臭予防の処方は『萬畢』には見られない。

［3］

【原文】

靈奇方。避時氣疫病法。正月未日。夜以蘆炬火、照井及厠臼中、百鬼走不入。（『醫心方』巻一四・避傷寒病方第二五）

【書き下し】

『霊奇方』。時気の疫病を避くる法。正月未日。夜 蘆炬の火[①]を以て、井及び厠・臼の中を照らせば、百鬼走げて入らず。

【注】

① 蘆（あし）で作った松明（たいまつ）の明かり。

【現代語訳】

『霊奇方』。季節ごとの疫病を避ける法。正月の未の日に、夜に蘆で作った松明で井戸・厠・臼の中を照らし出せば、すべての（疫病をもたらす）鬼が逃げ去り、家の中に入ってこない。

【補】

○ 呪術系の温病予防の処方である。温鬼の侵入場所（井戸・厠・臼）が示されている点が興味深い。

○［3］から［11］までは傷寒病（温病）に関する記述である。いずれも温病をもたらす疫鬼（温鬼）を退けるための呪術的処方（沐浴はひとまず置く）と考えてよかろう。

［4］

【原文】

又法。正月朔日。寅時、用黄土、塗門扉方二寸。（『醫心方』巻一四・避傷寒病方第二五）

【書き下し】

又法。正月朔日。寅の時、黄土を用て、門扉の方二寸を塗る。

【現代語訳】

又法。正月一日、寅の時に黄土を門の扉に一寸四方の広さに塗る。

【補】

○［4］［5］ともに温鬼の侵入場所を門とする。

○呪術系処方であるから、「黄土」は「竈中黄土」と考えるのがよかろう。所謂、家中を守る竈神の力に基づくものと思われる。

［5］

【原文】

又法。用牛矢、塗門戸方員二寸。（『醫心方』巻一四・避傷寒病方第二五）

【書き下し】

又法。牛矢[①]を用て、門戸の方円二寸を塗る。

【注】

① 牛の糞。

【現代語訳】

又法。牛の糞を用いて、門戸に二寸四方の四角と直径二寸の円の広さに塗る。（そうすれば温病を予防できる。）

【補】

○臭気による呪術系処方であろう。門や壁に黄土や動物の糞尿を塗る（スタンプする）という呪術は、文字（呪文）を記すというものと同質のものと考えてよかろう。

［6］

【原文】

又法。正月旦、若十五日。投麻子・小豆各二七枚、入於井中。避一年温病。（『醫心方』巻一四・避傷寒病方第二五）

【書き下し】

又法。正月旦、若しくは十五日。麻子・小豆各おの二七枚を投じて、井中に入る。一年の温病［①］を避く。

【注】

① 熱病の一種。『黄帝内経素問』に既にその名が見える。

【現代語訳】

又法。正月の一日、或いは十五日に、麻の実と小豆をそれぞれ十四粒ずつ準備して、井戸の中に入れる。（それで）一年間温病に罹らない。

【補】

○［6］と［7］を比較すると、非常に興味深いことに気づく。と

もに使用する薬材は同じであるにもかかわらず、[6] はそれを温鬼に侵入口とされる井戸に投じ、[7] は人がそれを飲むとする。もともといずれかであった処方が、伝承の過程で分かれたものであろうか、或いは、最初からいずれの処方でも予防可とされていたのであろうか。

[7]

【原文】

又法。正月旦。呑麻子・小豆各二七枚。辟却溫鬼。(『醫心方』巻一四・避傷寒病方第二五)

【書き下し】

又法。正月旦。麻子・小豆各おの二七枚を呑む。温鬼[①]を辟け却(しりぞ)く。

【注】

① 温病をもたらす病因としての鬼。

【現代語訳】

又法。正月の一日に、麻の実と小豆をそれぞれ十四粒ずつ飲む。(それで)温鬼を避け退ける(温病にかからない)。

【補】

○ [6] と同じ薬材で、こちらは「飲む」という処方だが、期日が指定されているので、こちらも呪術系処方としておく。

[8]

【原文】

又法。庚辰日。取鷄・犬毛、於門外微燒烟之。避溫疫。(『醫心方』巻一四・避傷寒病方第二五)

【書き下し】

又法。庚辰日。鶏・犬の毛を取りて、門外に於て微(わずか)に焼きて之を烟(いぶ)す。温疫[①]を避く。

【注】

① 温病に同じ。

【現代語訳】

又法。庚辰の日に、鶏の羽と犬の毛を準備して、門の外で少しだけ焼いて煙で燻す。(それで)温病に罹らない。

【補】

○ [5] の補で言及した臭気の呪力の一つと考えてよかろう。

[9]

【原文】

又法。五月十五日。日中取井花水沐浴。避邪鬼。(『醫心方』巻一四・避傷寒病方第二五)

【書き下し】

又法。五月十五日。日中に井花水を取りて沐浴す。邪鬼を避く。

【現代語訳】

又法。五月十五日に、太陽が南中した時、井花水で水浴びをする。(そうすれば温病をもたらす)邪鬼を避ける。

【補】

○ 細かな点での相違はあるが、「沐浴」という点で [9] と [10] は同

質である。

○ 期日指定があるので、呪術系処方としておく。

［10］

【原文】

又法。五月戊巳日。沐浴。避病。（『醫心方』巻一四・避傷寒病方第二五）

【書き下し】

又法。五月戊巳日。沐浴す。病を避く。

【現代語訳】

又法。五月の戊巳の日に、水浴びをする。病気を避ける。

【補】

○ 期日指定があるので、呪術系処方としておく。

［11］

【原文】

又云。使温病不相易法。以縄度所住戸中、屈縄燒斷。（『醫心方』巻一四・避傷寒病方第二五）

【書き下し】

又云。温病をして相易①せざらしむるの法。縄を以て住みし所の戸中に度（わた）し、縄を屈して焼けば断つ。

【注】

① ここでは病気がうつること。

【現代語訳】

又云。温病を伝染させなくする方法。住んでいる住居の戸口の内側に縄を掛け、その縄を（外して）曲げた状態（のまま）で焼けば、伝染を断ち切る。

【補】

○ 呪術系予防の処方である。恐らく、戸口にわたされた縄は、家に侵入しようとする疫鬼を捕らえるためのものであり、それを閉じた状態（輪になったままの状態）で焼くというのは、疫鬼を捕らえたまま焼き殺すことを意味するのであろう。

［12］

【原文】

靈奇方。未滿三月、取斧着婦人床下、卽反成男。（『醫心方』巻二四・變女爲男法第四）

【書き下し】

『霊奇方』。未だ三月に満たざるとき、斧を取りて婦人の床下に着けば、即ち反りて男と成る。

【現代語訳】

『霊奇方』。（妊娠して）まだ三か月にならないうちに、斧を妊婦の床の下においておけば、胎児はすぐに男の子になる。

【補】

○ 男子を生むための呪術的処方である。『霊奇方』は佚書であり、原本を確認できないため明言はできないが、『如意方』の四例と比べると引用数が圧倒的に少ない。

［13］

【原文】

靈奇方云。練質術。烏賊魚骨・細辛・栝樓・干薑・蜀枡、分等以苦酒漬三日。牛髓一斤煎黄色、絞去滓以裝面。令白悅去黑子。今案范汪方云、黑醜人更鮮好也。（『醫心方』巻二六・美色方第二）

【書き下し】

『霊奇方』に云ふ。練質術。烏賊魚骨・細辛・栝楼・干薑・蜀椒［①］もて、分等して苦酒を以て漬くること三日。牛髓一斤もて黄色に煎り、絞りて滓を去り以て面に裝ふ。白悅にして黑子を去らしむ。今案ずるに『范汪方［②］』に云ふ「黑醜の人 更まりて鮮好なり」と。

【注】

① 文意により「蜀枡」を「蜀椒」に改めた。順にコウイカの甲羅・ウスバサイシン（ミラノネ）・キカラスウリ・乾燥させたハジカミ・ナルハジカミ（フサハジカミ）。このうち細辛は『神農本草経』の上薬に、烏賊魚骨は中薬に、蜀椒は下薬に記載されている。また細辛と蜀椒については、「死肌」を治すという記述が見える。

② 晋の范汪（南陽順陽の人）に『范汪集』一〇巻等の著作があるが、関連については不詳。

【現代語訳】

『霊奇方』に言う。（肌）質を練る術。コウイカの甲羅・ウスバサイシン・キカラスウリ・乾燥させたハジカミ・ナルハジカミを準備して、それぞれ同量を酢に三日間漬け込む。それを牛の髓一斤で黄色になるまで煎り、絞って滓を取り去ったものを、顔に塗る。（そうすると、肌が）白く輝き、ホクロを取り去る。今案ずるに『范汪方』に「（肌が）黒く荒れている人も、（肌質が）改まってみずみずしく好いものとなる」とある。

【補】

○ 医学系療法である。ほぼ同一の文が『如意方』［43］（『淮南萬畢術』拾遺（三）、東洋古典学研究43）にも見えた。

［14］

【原文】

靈奇方云。達知術。取葛花陰干百日。日暮水服方寸匕而臥。心思念所欲爲事。覺則心開而知。或夢中大來吉。（『醫心方』巻二六・益智方第四）

【書き下し】

『霊奇方』に云ふ。知に達する［①］術。葛の花を取りて陰干すること百日。日暮に水もて方寸匕を服して臥す。心に為さんと欲する所の事を思念す。覚むれば則ち心開き［②］て知る。或は夢中に大いに吉を来す。

【注】

① 『醫心方』巻二六の益知方の他の項目にも「達知」の使用例は見られないが、本文から察するに「ひらめき」の類であろう。

② 『醫心方』巻二六の益知方の他の項目の使用例から、脳の働きを十全に発揮させる（もの忘れをなくする、ひらめき力を上げる、聡明にするなど）ことかと思われる。

【現代語訳】

『霊奇方』に言う。知に達する術。葛の花を準備して、百日の間、

干する。日暮れ時にそれを水で方寸匕だけ服用する。（そうして）心の中でやりたいと思った事を思いつめる。（そうすれば）目が覚めた時には、それについて理解している。或は夢の中で吉を導く。

【補】

○ 呪術系処方である。

[15]

【原文】

靈奇方云。取黄土酒和塗帳内戸下方圓一寸。至老相愛。（『醫心方』巻二六・相愛方第五）

【書き下し】

『霊奇方』に云ふ。黄土を取りて酒もて和して帳内の戸の下方円一寸に塗る。老いに至るまで相愛す。

【現代語訳】

『霊奇方』に言う。黄土を準備して、酒と混ぜて帳の内側の戸の下に一寸四方の四角形と直径一寸の円の広さに塗る。年老いるまで愛し合う。

【補】

○ [15]から[21]までは、心を操作する呪術と考えてよかろう。心を操作する呪術は、『萬畢』（六）に「竈之土不思故郷。〔注〕取竈前三寸方半寸、取中土持之、遠出令人不思故郷。（竈の土は故郷を思はず。〔注〕竈の前の三寸方半寸を取りて、中の土を取りて之を持てば、遠くに出づるも、人をして故郷を思はざらしむ。）」、（七）に「赤布在戸、婦人流連。〔注〕取婦人月事、七月七日焼爲灰置楣上、卽不復去。勿令婦人知。（月布、戸に在れば、婦人流連す。〔注〕婦人の月事を取りて、七月七日に焼きて灰と為し、楣の上に置かば、即ち復た去らず。婦人をして知らしむること勿れ。）」、（九）に「鵲腦令人相思。〔注〕取雌雄鵲各一、燔之四道通。丙寅日與人共飲酒、置腦酒中、則相思也。（鵲の脳は人をして相思はしむ。〔注〕雌雄の鵲各一を取り、之を四道通に燔く。丙寅の日に人と共に飲食するに、脳を酒中に置けば、則ち相思はしむ。）」、（三九）に「馬毛犬尾、親友自絶。〔注〕取馬毛犬尾、置朋友衣中、若夫婦衣中。自相憎矣。（馬毛・犬尾は親友をして自ずから絶たしむ。〔注〕馬毛・犬尾を取りて、朋友の衣の中、若しくは夫婦の衣の中に置く。自ずから相憎む。）」、（七九）に「埋髪竈前、婦安夫家。（髪を竈の前に埋むれば、婦安く夫家にあり。）」、（九七）に「取門冬・赤黍・薏苡爲丸、令婦人不妬。（門冬・赤黍・薏苡を取りて丸と為せば、婦人をして妬せざらしむ。）」の六例が見える。

[16]

【原文】

又方。取猪皮幷尾、着方一寸三分内衣領中。天下人皆愛。（『醫心方』巻二六・相愛方第五）

【書き下し】

又方。猪の皮并びに尾を取りて、方一寸三分を着けて衣の領中に内る。天下の人 皆愛す。

【現代語訳】

又方。猪の皮と尾を準備して、一寸三分四方の大きさにして、衣の

領の中に入れておく。世の中の人すべてが（あなたを）愛する。

【補】

○ 心を操作する呪術系処方である。

[17]

【原文】

又方。取竈中黄土以膠汁和着屋上五日。取塗所欲人衣、卽相愛。（『醫心方』巻二六・相愛方第五）

【書き下し】

又方。竈中の黄土を取りて膠汁を以て和して屋上に着くること五日。取りて欲する所の人の衣に塗れば、即ち相愛す。

【現代語訳】

又方。竈の中の黄土を準備して、それを膠の汁と混ぜて、屋根の上に五日間置いておく。それを好みの人の衣に塗りつけると、すぐに愛し合う。

【補】

○ 心を操作する呪術系処方である。

[18]

【原文】

又方。庚辛日。取梧桐木東南行根長三寸、尅作男人。以五色綵衣之着身。令親疎相愛。（『醫心方』巻二六・相愛方第五）

【書き下し】

又方。庚辛日。梧桐の木の東南に行きし根の長さ三寸を取り、尅して男人を作る。五色の綵を以て之に衣せ身に着く。親疎をして相愛せしむ。

【現代語訳】

又方。庚辛の日に、梧桐の木の東南方向に伸びている根を三寸切り取り、それで男の人形を作る。それに五色の布地の衣を着せて身に帯びておく。親疎に関わらず愛し合わせる。

【補】

○ 心を操作する呪術系処方である。

[19]

【原文】

靈奇方云。以桃板三寸書姓名、埋四會道中。卽相憎。（『醫心方』巻二六・相愛第五）

【書き下し】

『霊奇方』に云ふ。桃板三寸を以て姓名を書して、四会道[①]中に埋む。即ち相憎む。

【注】

① 四つ辻。

【現代語訳】

『霊奇方』に言う。長さ三寸の桃の板を準備して、それに（憎み合うようにさせたい者同士の）姓名を書き、それを四つ辻に埋める。（そうすると）すぐに憎み合う。

【補】

○ 心を操作する呪術系処方である。特に仲違いさせたい二人の名前

が記された桃札を四つ辻で焼くという部分に注目すべきであろう。四つ辻が領界域で他界と接触する部分であるという考え方は、既に『萬畢』の（九）に「四道通に燔く」という形で見える。この処方が見えるということは、治療が他界の存在（たとえば鬼神など）の力を借りて行われることを暗示していると考える。

○『万畢』（九）に「鵲の脳は人をして相思はしむ。〔注〕雌雄の鵲各一を取り、之を四道通に燔く。丙寅の日に人と共に飲酒するに、脳を酒中に置けば、則ち相思はしむ」とある。

［20］

【原文】

靈奇方云。解怒。埋其人髪於竈前。入土三尺。令不怒。（『醫心方』巻二六・相愛第五）

【書き下し】

『霊奇方』に云ふ。怒りを解く。其の人の髪を竈の前に埋む。土三尺に入る。怒らざらしむ。

【現代語訳】

『霊奇方』に言う。怒りを解く（方法）。怒っている人の髪の毛を竈の前の三尺の深さの所に埋める。怒らなくさせる。

【補】

○ 心を操作する呪術系処方である。呪術の処方及びその効果から、［15］の補で提示した『萬畢』七九の「髪を竈の前に埋むれば、婦安く夫家にあり」との近似性が注目される。恐らくもともとは同根の処方であり、伝承の過程で異同が生じたものであろう。

［21］

【原文】

靈奇方云。欲得人家好田、以戊子日、密作買券、埋着田中央。其主必來賣之。（『醫心方』巻二六・求富方第六）

【書き下し】

『霊奇方』に云ふ。人の家の好田を得んと欲せば、戊子の日を以て、密に買券[①]を作り、埋めて田の中央に着く。其の主必ず来りて之を売る。

【注】

① 買取を証明する証書。

【現代語訳】

『霊奇方』に言う。他家のよい田を手に入れたいと思ったならば、戊子の日にこっそりと買券を作り、（それを他家のよい）田の中央に埋めておく。持ち主がその田を必ず売りに来る。

【補】

○ 土地の所有者にその地を売る気にさせる心を操作する呪術と考えてよかろう。

［22］

【原文】

靈奇方。避寒術。雄黄・澤寫・枡附子、分等冶末。井花水服之。冬可單衣。（『醫心方』巻二六・避寒熱方第九）

【書き下し】

『霊奇方』。寒を避くる術。雄黄［①］・沢写［②］・椒［③］・附子［④］

もて、分等して冶して末にす。井花水もて之を服す。冬 単衣すべし。

【注】

① ヒ素の硫化化合物。『神農本草経』では中薬に「寒熱」に対応する薬物として示される。

② サジオモダカ。

③ 文意により「枡」を「椒」に改めた。

④ トリカブト。

【現代語訳】

『霊奇方』。寒さを避ける術。雄黄・サジオモダカ・サンショウ・トリカブトを準備して、それぞれ同じ分量を粉末にする。それを井花水で服用する。冬 一重の衣でも過ごせる。

【補】

○ [22]から[29]までは暑さや寒さを感じなくさせる術である。ただし、寒暑を感じない身体を作るものか、寒暑を感じない感覚を作るものかは、判然としない。いずれの場合も、『萬畢』にはこの種の術は見られない。

[23]

【原文】

又方。朮三升・防風二升・茛若子半升、熬之合末。服方寸匕。酒粥無在。連服勿廢。日盡一劑。冬不用衣。(『醫心方』巻二六・避寒熱方第九)

【書き下し】

又方。朮[①]三升・防風[②]二升・茛若子[③]半升もて、之を熬りて合して末にす。方寸匕を服す。酒粥は在ることなかれ。連服して廃するなかれ。日ごとに一剤を尽くせ。冬 衣を用いず。

【注】

① ウケラ。『神農本草経』の上薬にも見える。

② ハマスガナ。ハマニガナ。ヤマゼリ。

③ ロウトウ。

【現代語訳】

又方。ウケラ三升・ハマスナガ二升・ロウトウの実半升を準備して、これらを熬って合わせて粉末にする。方寸匕を服用する。酒粥を食してはならない。途中で飲むのを止めてはならない。毎日一剤を飲みきること。冬でも衣を必要としない。

【補】

○ 医学系処方である。

[24]

【原文】

又方。雄黄・丹沙・赤石脂・干薑、各四分合。以白松脂、令如梧子大、日呑四丸。十日止。卽不寒。冬日常不欲衣、可入水中。(『醫心方』巻二六・避寒熱方第九)

【書き下し】

又方。雄黄・丹沙[①]・赤石脂[②]・干薑もて、各おの四分して合す。白松脂[③]を以て、梧子の如き大きさにせしめ、日ごとに四丸を呑む。十日にして止む。即ち寒からず。冬日常に衣を欲せず、水中に入るべし。

【注】

① 丹砂。水銀と硫黄の化合物。

② 青黄黒白赤の五色がある硬質の粘土。『本草綱目』九に「五色石脂」として詳述がある。［27］に黒石脂、［28］に赤石脂、［29］に白石脂が見える。

③ 幹の部分が白い松。白皮松。

【現代語訳】

又方。雄黄・丹砂・赤色の石脂・乾燥させたハジカミを準備して、それぞれ四分の一ずつの分量を合わせる。それを白い松の脂を用いて、梧の種ぐらいの大きさにし、毎日四丸を飲む。十日で（飲むのを）止める。すぐに寒さを感じなくなる。冬でも常に衣を求めず、水の中にも入ることができる。

【補】

○ 医学系処方である。

［25］

【原文】

一方。加桂四分。（『醫心方』巻二六・避寒熱方第九）

【書き下し】

一方。桂四分を加ふ。

【現代語訳】

一方。（［25］の材料にさらに）桂四分を加える（そうすると寒さを感じない）。

【補】

○ 医学系処方である。

［26］

【原文】

又方。門冬・茯苓、分等末。服方寸匕日二。寒時單衣汗出。（『醫心方』巻二六・避寒熱方第九）

【書き下し】

又方。門冬[①]・茯苓[②]もて、分等して末にす。方寸匕を服すること日に二たびす。寒時に単衣にして汗出づ。

【注】

① 麦門冬（ジャノヒゲ）の略称。

② マツホド。

【現代語訳】

又方。ジャノヒゲ・マツホドを準備して、同じ量だけ（合わせて）粉末にする。毎日二回、方寸匕の分量を服用する。寒い時期に一重の衣でいても汗をかく。

【補】

○ 医学系処方である。

［27］

【原文】

又云。避熱術。雌黄・白礜石・黒石脂、分等。白松脂丸如小豆。呑五丸。此雌黄丸。（『醫心方』巻二六・避寒熱方第九）

【書き下し】

又云ふ。熱を避くる術。雌黄［①］・白礜石［②］・黒石脂もて、分等す。白松脂もて丸して小豆の如くす。五丸を呑む。此れ雌黄丸なり。

【注】

① 雄黄と対を為す鉱物。『本草綱目』巻九・雌黄には『土縮本草』に云ふ「陽石にして気の未だ足らざる者を雌と為し、已に足る者を雄と為す」と」とある。

② 白い玉石と思われるが、詳細は不明。

【現代語訳】

又言う。暑さを避ける術。雌黄・白礜石・黒色の石脂を準備して、同じ分量にする。それを白い松の脂で丸めて小豆の大きさにする。五丸を飲む。これが雌黄丸である。

【補】

○ 医学系処方である。

［28］

【原文】

又方。雄黄・丹沙・赤石脂、分等冶。和松脂如小豆。名曰雄丸。呑雌三丸雄一丸。不熱。（『醫心方』巻二六・避寒熱方第九）

【書き下し】

又方。雄黄・丹沙・赤石脂もて、分等し冶す。松脂と和して小豆の如くす。名づけて雄丸と曰ふ。雌三丸雄一丸を呑む。熱からず。

【現代語訳】

又方。雄黄・丹沙・赤色の石脂を準備して、同じ分量ずつ調合する。それを松の脂と混ぜて小豆の大きさにする。これを雄丸という。雌丸を三粒、雄丸を一粒飲む。暑さを感じなくなる。

【補】

○ 医学系処方である。

［29］

【原文】

又方。樊石・白石脂・丹沙・慈石・桂、各四兩。和以松脂如小豆。暮呑四丸。夏可重衣。（『醫心方』巻二六・避寒熱方第九）

【書き下し】

又方。礬石［①］・白石脂・丹沙・慈石・桂、各おの四両。和するに松脂を以てし小豆の如くす。暮に四丸を呑む。夏に衣を重ぬべし。

【注】

① 文意により「樊」を「礬」に改めた。

【現代語訳】

又方。ミョウバン・白色の石脂・丹沙・慈石・桂を、それぞれ四両準備する。それらを松脂と混ぜて小豆の大きさにする。夕方に四粒を飲む。（暑さを感じなくって）夏でも衣を重ね着することができる。

【補】

○ 医学系処方である。

［30］

【原文】

靈奇方。不沾法。蜘蛛塗布巾。天雨不能濡。（『醫心方』巻二六・避西雨濕方第一〇）

【書き下し】

『霊奇方』。沾れざる法。蜘蛛もて布巾に塗る。天雨ふるも濡らすあたはず。

【現代語訳】

『霊奇方』。濡れないようにする方法。蜘蛛を布巾に塗り込めば、雨が降ってきても（水をはじいて）濡れない。

【補】

○『萬畢』（一八）に「蜘蛛塗布、而雨自晞。〔注〕取蜘蛛置甕中、食以膏百日。煞以塗布、而雨不能濡也。（蜘蛛は布に塗れば、而ち雨自ずから晞く。〔注〕蜘蛛を取りて甕中に置き、食はすに膏を以てすること百日。殺して以て布に塗れば、而ち雨ふるも濡らすあたはざるなり。）」とある。

［31］

【原文】

靈奇方云。蜘蛛二七枚、盆盛食以膏、埋之垣下卅日。以塗足、行水上不没。（『醫心方』巻二六・避水火方第一一）

【書き下し】

『霊奇方』に云ふ。蜘蛛二七枚もて、盆に盛りて食はすに膏を以てし、之を垣の下に埋むること卅日。以て足に塗れば、水上を行きて没せず。

【現代語訳】

『霊奇方』に言う。蜘蛛を十四匹準備して、それを盆に入れて脂を食べさせ、垣の下に三〇日埋めておく。それを足に塗り込めば、（足が水に浮いて）水上を歩けて沈まない。

【補】

○『萬畢』（一九）に「蜘蛛塗足、不用橋梁。〔注〕取蜘蛛、與水狗及猪肪、置甕中、密以新縑、仍懸室後。百日視之、蜘蛛肥。殺之以塗足、渉水不没矣。又一法、取蜘蛛二七枚、内甕中、合肪百日。以塗足、得行水上。故曰「蜘蛛塗足、不用橋梁」。（蜘蛛を足に塗れば、橋梁を用いず。〔注〕蜘蛛を取り、水狗及び猪の肪を与へ、甕中に置き、密するに新縑を以てし、仍りて室後に懸く。百日にして之を視れば、蜘蛛肥ゆ。之を殺して以て足に塗れば、水を渉るも没せず。又一法に、蜘蛛二七枚を取り、甕中に内れ、肪を合す。百日にして以て足に塗れば、水上を行くを得。故に曰く「蜘蛛は足に塗れば、橋梁を用いず」と。）」とある。なお、葉徳輝は本条を『霊奇方』からは取っていない。

［32］

【原文】

靈奇方云。五月五日。取梧桐西南向枝長五寸、以爲人。螈蛩二枚幷以綵衣之、繫左臂。入軍不畏流矢也。（『醫心方』巻二六・避兵刃方第一二）

【書き下し】

『霊奇方』に云ふ。五月五日。梧桐の西南に向ひし枝の長さ五寸を取り、以て人を為る。螈蛩［①］二枚并びに綵［②］を以て之に衣せ、左臂に繫ぐ。軍に入るも流矢を畏れざるなり。

【注】

① 夏蠶（ナツゴ）。蚕の一種で、一年に二回収める。
② あやぎぬ。

【現代語訳】
『霊奇方』に言う。五月五日に、梧桐の枝で西南の方向に伸びているものを五寸切り取り、それで人形を作る。ナツゴ二匹とあやぎぬをその人形に着け、左肘につけておく。（そうすれば）軍に入っても、飛んでくる矢を恐れなくなる。

【補】
○［32］と［33］は武器による攻撃を恐れなくさせる処方である。この種は『萬畢』には見られない。これも心を操作する呪術と言ってよい。

［33］
【原文】
又方。雲母・樊石・慈石、分等冶之合煮。以爲湯浴之。不畏五兵。（『醫心方』巻二六・避兵刃方第一二）

【書き下し】
又方。雲母・樊石・慈石もて、分等し之を冶して合し煮る。以て湯を為り之を浴ぶ。五兵［①］を畏れず。

【注】
① 五種類の武器。五種が何を指すかについては、諸典籍によって異なる。

【現代語訳】
又方。雲母・樊石・慈石を準備して、それぞれ同じ分量を調合して煮る。その煮汁を浴びると、五種の武器（による攻撃）を恐れなくなる。

【補】
○ 心を操作する呪術系処方であるが、使用される薬材が一般の医学系治療のものに等しい。

［34］
【原文】
靈奇方。避蚊。桂屑若楝葉屑若蒲、以一升和一斗粉中。以粉身則辟蚊。（『醫心方』巻二六・辟虫蛇第一五）

【書き下し】
『霊奇方』。蚊を避く。桂の屑、若しくは楝葉［①］の屑、若しくは蒲もて、一升を以て一斗の粉の中に和す。以て身に粉せば則ち蚊を辟く。

【注】
① オウチ。

【現代語訳】
『霊奇方』。蚊を避ける（方法）。桂の屑、或いはオウチの葉の屑、或いは蒲を準備して、一升分を一斗の粉と混ぜる。その粉を身に着ければ蚊を避けることができる。

【補】
○［34］から［36］までは蚊や虱などを避けるための処方である。この種のものは『萬畢』には見られない。生活の知恵系の術である。

［35］

【原文】

又方。昌蒲花及屑、着席下、遣虫虱。（『醫心方』巻二六・辟虫虵第一五）

【書き下し】

又方。昌蒲の花及び屑もて、蓆下に着くれば、虫虱を遣る。

【現代語訳】

又方。昌蒲の花と（その葉の）屑を準備して、それを蓆の下にまいておけば、虱を追い払う。

【補】

○［34］［35］は経験に基づく処方であろう。呪術的要素はない。

［36］

【原文】

又方。取初雪三指撮、擲置所臥席。勿令人知。（『醫心方』巻二六・辟虫虵第一五）

【書き下し】

又方。初雪三指撮を取り、擲（なげう）ちて臥せし所の蓆に置く。人をして知らしむるなかれ。

【現代語訳】

又方。初雪を三本の指でつまみ取り、それを寝床の蓆に投げつける。人に知られてはならない。（そうすれば、虱を追い払うことができる。）

【補】

○ 呪術系処方である。

8 『得富貴方』

『得富貴方』は『隋書』経籍志・『日本国見在書目録』ともに見えず、現在は伝わらないが、『醫心方』には全六条を確認することができる。これらを見ると、内容的に『萬畢』との近似性が高い。『萬畢』には

（三八）燒角入山、虎豹自遠。〔注〕燒角入山、則虎豹自遠。惡其臭也。（角を焼きて山に入れば、虎豹 自ら遠ざかる。〔注〕角を焼きて山に入れば、則ち虎豹 自ら遠ざかる。其の臭きを悪めばなり。）

↓『醫心方』巻二六避虎狼方「欲入山燒羊角將行。虎狼皆走避人也。」

の一条が同文として葉徳輝によって提示されている。

［1］

【原文】

得富貴方云。欲至病人家、手中作鬼字。（『醫心方』巻一四・避傷寒病方第二五）

【書き下し】

『得富貴方』に云ふ。病人の家に至らんと欲せば、手中に鬼字を作（な）す。

【現代語訳】

『得富貴方』に言う。病人のいる家に行こうと思ったら、（病気が移らないように）手に「鬼」字を（あらかじめ）書いておく。

【補】

○ 病気が移らないようにするための呪術系処方である。病因を鬼と

するのは当時の一般的な考え方であるが、「鬼」字を手に書いて予防するという対処は『萬畢』には見られない。

［2］

【原文】

得富貴方云。大火之精名宗无。見火畏呼宗无、火卽止。大水之精名冈像。入水畏呼冈像、卽水不能害人。（『醫心方』巻二六・避水火方第一一）

【書き下し】

『得富貴方』に云ふ。大火の精 名は宗无［①］。火を見て畏れて宗无と呼べば、火即ち止む。大水の精 名は罔像［②］。水に入り畏れて罔像と呼べば、即ち水 人を害すあたはず。

【注】

① 宋無忌。『玉燭宝典』二、『芸文類聚』八〇等が引く『白沢図』に火精としての宋無忌の記述が見える。佐々木聰『復元白沢図―古代中国の妖怪と辟邪文化―（以下『復元白沢図』と略記）』（白澤社、2017）五五頁に詳細な説明がある。

② 水中の妖怪、或いは水神の名。後者の例として『荘子』達生に「水に罔象あり」とあり、郭象注に「状は小児の如し。赤黒色にして赤爪・大耳・長臂なり。一に水神の名と云ふ」とする。また『淮南子』氾論に「水は罔象を生ず」とあり、高誘注に「水の精」とする。さらに、罔象の記述も『白沢図』に見え、これも『復元白沢図』六二頁に詳細な説明がある。

【現代語訳】

『得富貴方』に言う。大火の精は名を宗无という。火を見て恐ろしい時は宗无と呼べば火は消える。大水の精は名を罔像という。水に入って恐ろしい時は罔像と呼べば、すぐに水は人を害せなくなる。

【補】

○［2］から［4］までは水火の難を避けるための呪術的処方であるが、加えて水火の精の名を提示し、その名を呼ぶことによって難を避けることができるとする文化的背景も読み取ることができる。

○［2］と［4］に見える各種の精は『白沢図』と深い関わりを持っている。【注】①で提示した佐々木氏の『復元白沢図』も『得富貴方』は拾っておらず、両書の異同もあることから、今後のさらなる研究の進展が期待できる。また本グループは『白沢精怪図』との関連も考えられると佐々木氏は指摘する。本書については、佐々木氏に「『白澤精怪圖』再考― S6261 を中心として―」（敦煌寫本研究年報11、2017）がある。

［3］

【原文】

又云。欲入水、手中作王字。又呼弘張。（『醫心方』巻二六・避水火方第一一）

【書き下し】

又云ふ。水に入らんと欲せば、手中に王字を作す。又 弘張［①］と呼ぶ。

【注】

① 未詳。

【現代語訳】
又言う。水に入ろうとする時は、手に「王」字を書く。或いは「弘張」と呼ぶ。
【補】
○［2］［4］と同質のものであるが、「王」「弘張」ともに典拠が見い出せない。

［4］
【原文】
得富貴方云。雷電精石曰閃題。大道精曰慶弓。大山精曰善善。大澤精曰委耶。大樹精曰彭侯。空室精曰曹羊。（『醫心方』巻二六・辟邪魅方第一三）
【書き下し】
『得富貴方』に云ふ。雷電の精を閃題［①］と曰ふ。大道の精を慶弓［②］と曰ふ。大山の精を善善［③］と曰ふ。大沢の精を委耶［④］と曰ふ。大樹の精を彭侯［⑤］と曰ふ。空室の精を曹羊［⑥］と曰ふ。
【注】
① 未詳。
② 『白沢図』に「慶忌」という名の精が見える（『復元白沢図』六三頁）。ただし慶忌は水石の精とされる。
③ 『白沢図』に「喜（『瑞祥志』は「善」に作る）」という名の精が見える（『復元白沢図』六七頁）。ただし喜（善）は山谷の渓流の精とされる。
④ 『白沢図』に「委然」という名の精が見える（『復元白沢図』五九頁）。ただし委然は玉の精とされる。
⑤ 人面狗身の樹木の精の名。『搜神記』一八に見える。また『搜神記』同巻が引く『白沢図』にも見える。
⑥ 『白沢図』に「黄羊」という名の精が見える（『復元白沢図』六四頁）。ただし黄羊は大河の精とされる。
【現代語訳】
『得富貴方』に言う。雷電の精を閃題という。大道の精を慶弓という。大山の精を善善という。大沢の精を委耶という。大樹の精を彭侯という。空室の精を曹羊という。
【補】
○［2］から［4］の用例から考えて、これも様々な精の名を提示するだけの博物学的記述と捉えてはなるまい。名を知ることによって、それらによる厄災を逃れんとするための情報と見るべきであろう。『萬畢』の中にも博物系として分類したものが四例ほどあったが（四七、九二、一〇六、一〇八）、厄災を逃れるための博物系は存しない。

［5］
【原文】
得富貴方云。欲入山燒羊角將行。虎狼皆走避人也。（『醫心方』巻二六・辟虎狼方第一四）
【書き下し】
『得富貴方』に云ふ。山に入らんと欲せば羊角を燒きて将に行かんとす。虎狼皆走り人を避くるなり。

【現代語訳】

『得富貴方』に言う。山に入ろうと思うならば、羊の角を焼いてから行け。虎や狼がすべて逃げて人を避ける。

【補】

○『萬畢』三八に「燒角入山、虎豹自遠。〔注〕燒角入山、則虎豹自遠。惡其臭也。（角を焼きて山に入れば、虎豹 自ら遠ざかる。〔注〕角を焼きて山に入れば、則ち虎豹 自ら遠ざかる。其の臭きを悪めばなり。）」とある。

［6］

【原文】

得富貴方云。蛇字宜方。心念之則不見。見蛇呼宜方、卽失不見。（『醫心方』巻二六・辟虫蛇方第一五）

【書き下し】

『得富貴方』に云ふ。蛇 字は宜方[①]。心に之を念ずれば則ち見はれず。蛇を見て宜方と呼べば、即ち失して見えず。

【注】

①　未詳。

【現代語訳】

『得富貴方』に言う。蛇は字を宜方という。心に（宜方と）念じると蛇は現れない。また蛇を見つけたら宜方と呼ぶと、すぐに姿を消す。

【補】

○［1］から［4］までと同質の呪術系処方である。蛇を「宜方」とする文は未見である。